夜は僕

イヌモグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜は僕

【Ｎコード】
Ｎ７１５９Ｓ

【作者名】
イヌモグル

【あらすじ】
栗東　駿は変人である。
栗東　駿は孤独である。
栗東　駿は愚者である。
栗東　駿は夜である。

○

友達はできる方だ。
でも親友となると、一人も出来たことがない。
これからもできないし、作ろうとも思わない。
学校は学校。
バイト先はバイト先。
それぞれがそれぞれ、それぞれだけの関係。
休日、誰かの家にお邪魔することもなければ、その逆も然り。
個人的な空間を、侵されたくないから。
だから僕は一人が好きだ。
気楽だ。
自由だ。
静かだ。
なにより、一人だ。
もしかしたら、僕の友達は友達ではないのではないか？
そんなの、そんなの。
そんなの、素敵すぎる。

○○

食事中も、彼らのおしゃべりは止まらない。

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。

昨日のテレビがどうだの、あのアーティストがどうだの。
彼女がどうだの、車がどうだの。
講義がどうだの、教授がどうだの。

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。

うるさいな。
そんなこと、別に興味はないよ。

「栗さんは？昨日見た？」
「いいや、見てない。どんなんだった？」

そう言えば、あとは勝手に話してくれる。
僕は適当に相槌うって、言葉を軽く受け流す。
内容なんか、覚えていない。

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。

僕は聴くだけ。
語らせておけば、相手は幸せ。

「それで、アイツが出てきてさ」
「山任、言葉じゃわからんだろ」

「アレはウケた。すげぇ笑った」
「場違いすぎて言うことなしだな」

あとは彼らが、勝手に進める。
僕は適度に頷きながら、頭に言葉を通過させる。

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。
ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。

どんな番組観てようが、それは自分の勝手だよ。
合わせる気なんて更々ない。
僕は僕だけ、それだけだ。
どんな音楽聴いたりするの？
好きな音楽をよく聴くよ。
どんな音楽が好きだったりするの？
良いと思ったら音楽が好き。
どうせ誰にもわからない。
他人のこともわからない。
僕は僕だけ、それだけで、一通り事は足りてるよ。

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。

「そろそろ予鈴がなるんじゃね」
「新堀、次はメディア論か？」
「社台も同じだったよな」
「山任一人でドイツ語か」
「隣が女で楽しいぞ」
「よこせよ」
「代われ」
「それから栗東なんだっけ？」

「栗さんあれだろ、二限まで」
「花金、花金」
「新堀、なんか親父くせぇ」

どんな時間割作ろうが、そんなの僕の勝手だよ。
彼らは彼ら。
僕は僕。
それで十分じゃないかな。

「ところで、今日は金曜だし、どっか食いにでも行かないか？」
「ラーメンそろそろ飽きてきた」
「俺はどこでも構わんよ」
「栗東どっか行きたいか？」
「俺はバイトがあるからさ」

そんな都合の良い嘘で、僕は誘いを切り抜ける。
付き合い悪いと言われても、そこまで嫌われるわけじゃない。

「一人暮らしはやっぱりキツいか」
「そうでもないよ、余裕はないけど」
「無理はすんなよ苦学生」
「苦しいほどではないけどね」

じゃあまた今度、誘うから。
彼らはそう答えるけれど。
別に誘ってくれなくていい。
僕の世界を侵されたくない。

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。
ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。

そしてようやく、予鈴がなった。
彼らも席をたち始める。

「そんじゃ栗さん、また来週」
「はいはい」
「バイナラ」
「新堀そろそろ死語やめろ」

そうして彼らは去っていく。
これでようやく、僕一人。
素敵だ。
とても素敵だ。

○○○

カバンに財布と携帯電話。
鍵、ｉＰｏｄ、充電器。
それからβ刺激薬。
外出中に発作が出れば、薬に頼る事しかできない。
誰を上がらせるわけでもないのに、小綺麗にした部屋の隅で。
僕は準備を進めていた。
金曜深夜の習慣だ。
時計は既に一時半。
そろそろ夜も更けてきた。
僕は灯りを消してから、靴を履き、部屋の外に出る。
ガチリと金属音が鳴り、鍵が完全に締められる。
神経質にガチャガチャと、僕はそのドアを押して引いて、開かないことを確認すると、ようやく廊下を歩き出す。

すたすた、すたすた。
かつかつ、かつかつ。
切れかけ蛍光灯の下、不気味に暗い階段を、一段一段丁寧に、僕は静かに踏みつける。

かんかん、かんかん。
ぎっぎっ、ぎっぎっ。
なるだけ音を立てぬよう、だけれど自然に聴こえるよう、僕は地面を踏みつける。
スニーカーで捉え、蹴りつける。

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

僕は歩く。
頭の中の地図を引き出し、道をなぞって僕は歩く。
夏も過ぎ、秋になると、出掛ける人はあまりない。
まるで僕だけの空間だ。
まるで僕だけの街並みだ。

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

今日はどんな道を行こうか。
行ったことのない道がいいかな。
引っ越してから半年となると、そんな道はもう少ないか。

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

僕は歩く。
今日はドクペ自販機ルート。
僕の頭の地図を広げて、公園までのナビゲーション。
ゆっくり、ゆっくり、一歩ずつ。
僕は地面を踏みつける。
あそこの家主は夜型だ。
その電柱には張り紙がある。
ラインナップが変わったな。
あの街灯はまだ故障中。
僕は気付いた情報を、頭の地図に書き込んでいく。

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

お目当ての自販機には、絶対に売り切れない商品がある。
おそらくは、僕しか買わない、僕しか飲みたくない。
お世辞にも、美味しいなんて言えないし、むしろ不味い。
それでも時々飲みたくなる。
不味いと知って、なおも買う。
硬貨をいくつかを飲み込ませ、煌々と光るボタンを押す。
ガコンと大きな音が鳴り、僕はその缶を取り出した。
もちろん今日も不味いんだろうな。
そう考えると、わくわくした。

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

僕は歩く。
例の自販機を後にして。
カバンに缶を詰め込んで。
地図の更新を進めながら。
秋はとても良い季節だ。
だんだん涼しくなっていく。
夏とは違って蚊も少ないし、人に出くわす心配も少ない。
素敵な季節。
素晴らしい季節。
一人の季節。
良い季節。
行き先は公園。
無意識のナビ。

いろんな事を考えながら、だけれど何も考えずに。
外を散歩しているようで、本当は脳内を歩いてる。
僕は街だ。
僕は夜だ。

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

この公園の、奥の方。
街灯の無い場所がある。
ベンチはいくつか並んでいるが、光源などは何もない。

すたすた、すたすた。
すたすた、すた？

誰かいる。
ベンチに座って、うずくまって。
暗いからよくわからないけれど。
僕の定位置に人がいる。

けほけほ、けほけほ。

発作だろうか。
けれどもそれは僕じゃない。
ベンチに座った、あの人だ。

すたすた、すたすた。

あの人も、一人だったら、同じかな。
僕の公園に入ってくるのは、虫酸が走るほど嫌だけど。

深夜なのだから、許してあげよう。

すたすた、けほけほ。
すたすた、すた。

座っているのは女性かな。
色素の薄い、髪の毛だ。
あんまり好きでは無いけれど。
大講堂のグラデーション。
後ろにいくほど薄くなる。
似合ってないし、傷んでる。
あと、うるさい。
だからあんまり、好きでは無い。

けほけほ、けほけほ。
けほけほ、けほけほ。

「大丈夫ですか？」

咳してばかりで、返事がない。

けほけほ、けほけほ。
けほけほ、けほけほ。

「吸入、ありますか？」

けほけほ、ふるふる。

咳き込みながら、首を振る。
僕はカバンの内ポケット、貴重品入れの奥の方から、セレベントな

んかを取り出して、それを彼女に差し出した。
急な喘息発作には、とりあえずには効くはずだ。

「使い方、わかりますか？」

けほけほ、ふるふる。

今度は縦に首を振る。
ああ、良かった。
救急車なんて呼ばれたら、静かな夜が台無しだ。
　彼女はそれを受けとると、咳き込みながら僕を見た。
暗くて何も見えないが、たぶん整った顔だろう。

けほけほ、けほけほ。

「大丈夫。新品なので」

少なくとも。
僕は他人の吸入器を、金輪際使いたくはない。

　けほけほ、けほけほ。
かちっ、すぅっ。

ドライパウダーを吸い込んで、彼女の発作は収まってくる。
でもどうしよう、吸入器。
僕のが無いや、どうしよう。
でもまた買えば、それでいいか。
アレは彼女の物にしよう。

　けほ、けほ。

けほけほ、けほ。
彼女はうずくまったまま。
発作が起きているときは、座った方が楽だから。

けほ、けほ。
けほ。

「少しよくなってきましたね」

咳はだんだん落ち着いて、彼女も少し楽そうだ。
何か飲むもの、あればいいけど。
水を飲んだら、大分楽になる。
そういえば。
さっき買った、あのジュース。
たぶん口には、合わないけれど。

けほ。
けほ？

「これでも飲んで、安静に。あんまり美味しくないですが。手持ちがこれしか無いもので」

けほ、けほ。
かちっ、ぷしゅっ。

なんとも言えないクスリの匂い。
いいや、毒かもしれないな。
とにかく、彼女はその缶を、一口飲もうと傾けた。

ごく、ごく。
ごく。

「……けほ」
「美味しくないなら正直に」
「……あまり、好きにはなれません」
「なるほど。僕も同じです」
「……それならどうして？」
「不味いからです」

けほけほ、けほ。
けほ。

「不味くて悪化しましたかね」
「……でも、痰は切れました」
「それなら良かった、でも安静に」
「……はい、ありがとうございます」

彼女は弱々しい声で、僕の質問に答えてくれる。
僕から誰かと会話するのは、ずいぶん久しぶりかもしれない。
だけれども。
なんだか心が弾むのだ。
彼女は夜の一部だから。

「……どうしてわざわざ不味いモノを？」
「好奇心とか、そういうのです」
「……怖いもの見たさもありますか？」
「ええ、もちろん、そうですね」

くすくす、くすくす。

けほけほ、くすくす。

おかしな事はわかってる。
自分自身、なんで買うのかわからない。
僕だって、くすくす笑ってしまいたい。

くすくす、くすくす。
くすくす、けほ。

「……ごめんなさい、笑ってしまって」
「おかしいですよね、こんなこと。僕でも笑ってしまいます」
「……でも、なぜか、もっと飲みたくなりますね」

僕もそう。
不味いからこそ、もう一口。
彼女も同じ、もう一口。
愚かかな。
愚かだからこそ。

ごく、ごく。
ごくごく、けほ。

「……やっぱり美味しくないですね」
「僕自身、何度も飲んでみていますが、慣れはしたものの、好きではないです」
「……美味しいわけでは無いけれど、何度も飲みたくなる味です」

なぜだろう。
なぜだか彼女は心地よい。
彼女は夜で、僕は夜。

夜は僕のものなのだから、彼女もきっと、僕のもの。
そうか。
僕も彼女の夜のもの。
きっと僕も、彼女のもの。

ごくごく、ごくごく。
ごくごく、けほ。

「……よくここへ？」
「ええ、そうです。いつも散歩で、ここへ来ます」
「……こんな夜中に？」
「夜中だからこそ」
「……夜は好きですか？」
「ええ、もちろん」
「……私も夜は、大好きです」

三段論法、ナルシズム？
いいや、確かに。
彼女は夜で、僕も夜。
なるほど、そうか、そうなのか。

ごく、けほ。

「なんだかあなたは夜のようだ」
「……あなたもずいぶん夜ですね」
「そうですか？」
「……そうですよ」

ああ、なんて。
なんて、素敵なんだろう。

「不思議ですね」
「……そうですね」
「会って間もないはずなのに」
「……なぜだか落ち着く。不思議です」

ごく、ごくごく。
ごくごく、ごく。

「……発作はずいぶん収まりました」
「あまり、無理はなさらずに」
「……ありがとう。私はそろそろ、帰らなければ」
「そうですか。送って行きたいところですが、電灯の下であなたを見るのは、些か無粋な気がします」
「……私もきっと、同じです。明るいところは、嫌いですから」

すた。

彼女は立ち上がる。

「……ここに来れば、会えますか？」
「金曜深夜で、晴れていれば」
「……あなたともっと、話したい」
「僕もあなたと、話したい」

もっと。
もっと夜に触れてみたい。

「……それでは、これで」
「よい夜を」

「……よい夜を」

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

彼女は夜に溶けていく。
そして見えなくなっていく。

すたすた、すたすた。
すたすた、すた。

足音ですら、消えていく。
きっと彼女は、夜だから。
僕はカバンに手を入れる。
引き出したのは、ｉＰｏｄ。
金曜深夜はこの席で、好きな音楽を聴きながら、気が済むまで、夜と溶け合う。

じゃかじゃか、すぅっ。
きゅうっ、じゃかじゃか。

フレットノイズ。
ああ、なんて。
なんて素敵なんだろう。
きっと彼女も、この夜に、溶けているなら、僕らは一つだ。
ああ、素敵だ。
とても、素敵だ。

〇〇〇〇

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。
かりかり、かりかり。

うるさいな。
どうして君らは。
僕のとなりに。
いつも来るんだ。

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。
ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。

山任　大樹。
講義くらい、真面目に受けたらどうなんだ？
社台　栄進。
携帯は、カバンにしまってくれないか？
新堀　朝日。
頼むから、僕に話しかけないでくれ。

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。
ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。

僕はただ、真面目に受けたいだけなのに。
気付いたら、彼らがいつも近くにいる。
真面目に受ける気がないのなら、後ろの席で寝ててくれ。

「そういやさぁ」

新堀が、また新たな話題を繰り出す。
やめてくれ。
教授の声が聞こえない。

「お前らさ、『妖怪女』知ってるか？」
「なんだそれ」
「知らねーよ」
「心理学科の二つ上、白髪でいつも帽子にグラサン、夏でも長袖着てるヤツ」
「あぁ、なんとなく、見たことあるな」

そんなの、ただの白皮症。
妖怪だなんて、幼稚すぎるよ。
どうして、そんなに、君たちは。
どうして。

「栗さん、なんか知ってるか？」
「いいや、俺は見たこと無いな」

そんな嘘。
逃げるための嘘。
彼らに知識を与えれば、そこから会話が育ってしまう。
だから逃げる。
隔壁を作る。

「で、その妖怪がどうしたんだよ」
「いや、すげえなって思ってさ」
「色が？」
「色が」
「格好が？」

「格好が」
「あぁ」
「そうだな」

そんなこと。
小学生と変わらない。
帽子長袖サングラスは、ただ日光を避けるため。
それだけなのに、それだけなのに。
それだけなのに、どうしてそんな。
そんな下らない偏見に、僕を付き合わせないでくれ。

「変だよな、白髪とか。ゴスロリみたいなもんなのか？」
「精神病とか、怖すぎね？」

一体誰が。
誰が病気に追い込むのか。
君たちは何もわかっていない。

ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ。
かりかり、かりかり。

どうして前に座っているのに。
受講を邪魔されてしまうんだ？
彼らと縁を絶ち切れば、一人の時間が増えるのに。
だけど僕には。
勇気がない。
今に始まったことじゃない。
付和雷同は、生来の癖だ。
だから。
だから、仕方ない。

かりかり、かりかり。
かりかり、かり。

教授が講義の終わりを告げる。
後ろの方から、ぞろぞろと、色素の薄い連中が、講堂の外へ、向かってく。

「はー、昼飯どうすっか」
「今から行っても混むだろう」
「断食」
「嫌だね」
「栗東、行くぞー」
「ああ、ちょっと待て」

仕方ない。
僕は普通の人間だ。
だから、僕には、そんなこと。
常軌を逸脱した行動など。
普通ではない行動なんて。
できるわけなど、無いんだから。

「そういや、アイツ」
「妖怪？」
「妖怪」
「またかよ」
「もういいよ」
「アイツ、この前倒れててさ、保健室連れていかれてた」
「なんで？」
「喘息、咳してた」

ん？
日光？
喘息？
そうか、彼女は、そうなのか。

かちゃかちゃ、かちゃかちゃ。

僕は筆記具を忙しくしまう。
彼らに急かされ、急いでしまう。

かちゃかちゃ、すた。

楽しみだ。
金曜の夜が、楽しみだ。

〇〇〇〇〇

そわそわ、そわそわ。
そわそわ、そわそわ。

時計は十時を回ったばかり。
まだまだ時間が早すぎる。
でも、僕は。
でも。

かちゃ、がちゃがちゃ。
すたすた、かつかつ。

きっと彼女が夜なのは、白に恐れをなしたから。
暗闇の中に溶けてしまえば、もはや色など関係ない。
だから、だから。
だから彼女は。

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

僕は彼女のことを知る。
夜が明るくなっていく。
彼女もそう。
彼女が僕を知れば知るほど、夜は明るくなっていく。
そうして互いの姿を捉え、彼女は僕の、僕は彼女の。
ああ。
素敵だ。

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

やはり、出るのが早いだろうか？
彼女はきっと、来ていない。
それでも、それでも。
それでも、僕は待っていたい。
彼女と何を話そうか。
彼女の何を知りたいか。
彼女は僕に何を求めるか。
彼女は夜か。
僕は夜か。
ベンチに座って、一人きり。
頭の中を、撹拌したい。

ちゃりん、ちゃりん。
ぴっ、がこん。

ああ、どうして、こんなにも。
どうしてこんなに、楽しいのだろう。
他人の事など、興味はないのに。
どうして、どうして。
彼女は、他人？

すたすた、すたすた。
すたすた、すたすた。

違うな、彼女は。
彼女は、夜だ。
夜のことなら、もっと知りたい。

夜のことなら、もっと触れたい。
夜を、彼女を。
　だから、僕は、公園へ向かう。
待っていないのを知りながら。
僕は、アスファルトの上を。
ひたすら、歩く。
夜の元へ。

　すたすた、すたすた。
すたすた、すた。

　待っていないのは知っていた。
気長に待とう、そうしよう。
　僕はベンチに腰かける。
静かだ。
とても静かだ。
時おり聞こえてくる音は、遠くで車の音くらい。
後は、虫が。
虫の声しか聞こえない。

　じー、じー。
じー、じー。

　彼女はきっと。
僕のように。
きっと、夜に逃げ出して。
　そうして、溶けて、彼女は、彼女は。
　ああ、早く。
早く、会いたい。

じー、じー。
じー、すたすた。

誰かの何かの音が近付く。
一歩一歩、踏みしめて。
彼女か？
彼女か。
きっと、そう。

じー、すたすた。
すたすた、じー。

夜が少しずつ、近づいて。
僕は、僕は。
ああ、素敵だ。
素敵な夜だ。

すたすた、すたすた。
すたすた、すた。

「……ずいぶんお早いですね」
「なんだか気分が弾んでしまって」
「……私もあなたと、話がしたくて」

ああ、すぐ、近くに。
夜が、僕の。

「……お隣、座っても、よろしいですか？」
「ええ、どうぞ」

すた、とす。

僕は、僕は。

僕は、もう。

「素敵です。夜も、あなたも」

「……私も。あなたが、素敵です」

「おかしいですね」

「……不思議です」

「あなたといると、満たされる」

「……なぜだか、妙に落ち着いて」

「互いに名前もまだ知らないのに」

「……まるで、あらすじがあるかのように」

「舞台の上の」

「……戯曲のように」

「ああ、マリア」

「……ああ、トニー」

「なんて」

「……なんて」

くすくす、くすくす。

くすくす、くすくす。

ウェストサイド物語。

二人でくすくす笑いだす。

どうして、こんなに。

どうして、こんなに。

「……おかしいですね、私も、あなたも」

「狂っているような気がします」

「……それでも、いいです、あなたなら」
「僕も、あなたと一緒なら」

不思議なくらい、するすると、勝手に言葉が、唇を抜ける。
彼女が何を思っているか。
彼女が何を言いたいのか。
なぜだか、なぜだか。
なぜだか、わかる。

「あなたは、なぜ夜が好きですか？」
「……夜は、全てに慈悲深い。全てに愛を、与えてくれます」
「なんだ、訊くまでもありませんね」
「……あなたも、夜の優しさに？」
「ええ、もちろん。僕も、夜に愛されたい」

今、僕の。
僕の隣の、静かな夜に。

「……運命なんて、そんなもの」
「信じたことなど無いけれど」
「……だけれど、これは信じたい」
「戯曲のように」
「……映画のように」
「嘘だとわかっているけれど」
「……今、舞台にいる瞬間は」
「本当のことだと」
「……信じていたい」
「なんて」
「……なんて」

くすくす、くすくす。
くすくす、くすくす。

「あなたのことなら、わかる気がする」
「……あなたは孤独」
「あなたは一人」
「……あなたは好奇心旺盛で」
「なのにあなたは、排他的」
「……あなたはただただ愛されたい」
「そして同時に、愛したい」
「……それは本能で」
「それは理性で」
「……それはエスで」
「それは自我」
「……あなたは自分に自信がなくて」
「あなたは誰にも愛されなくて」
「……寂しくて」
「悲しくて」
「……情けなくて」
「可哀想で」
「……自分のことが大嫌いで」
「この世で一番自分が好きで」
「……臆病で」
「傲慢で」
「……怠惰で」
「生真面目で」
「……神経質で」
「無頓着で」
「……家族が嫌いで」
「認められたくて」

「……どこへ行っても」
「居場所がなくて」
「……やっとの思いで逃げ出したものの」
「自分の幼稚さに気が付いた」
「……愚かで」
「間抜けで」
「……浅短で」
「白痴で」
「……隣の青い芝を見て」
「ただ、ひたすら、妬み倒し」
「……向かいの枯れた花を見て」
「自らの花を祭り上げる」
「……どうして、どうして」
「どうして、こんなに」
「……自己紹介をしただけで」
「あなたをわかってしまうのか」
「……なんて」
「なんて」

罵り合い？
いいや、違う。
夜であることの再確認。

くすくす、くすくす。
くすくす、くすくす。

「……なんて茶番」
「でも心地好い」
「……芝居じみた、言葉と言葉で」
「一つの舞台を作るかのよう」

くすくす、くすくす。
くすくす、くすくす。

自然と僕らは手を取り合う。
暖かくて、柔らかで。
夜の優しさが、満ち溢れてる。

「そろそろ真面目に話しましょうか」
「……私も言おうと思っていました」
「考えることは、同じですね」
「……まるで鏡か、なにかのよう」
「あなたは、僕で」
「……あなたは、私で」
「ほら、また、茶番」
「……ああ、また、茶番」
「けれども茶番が心地好い」
「……けれども茶番に恋してる」

くすくす、くすくす。
くすくす、くすくす。

「……職業は？」
「K大生です」
「……あら、あなたも」
「ええ、僕も」
「……もしかすると、お互いに」
「太陽の下で、会っているかもと？」
「……それは、とても」
「とても？」

ふるふる、ふるふる。

彼女はとたんにうずくまり、それは嫌だと首を振る。

ふるふる、ふるふる。

「……光はもれなく嫌いです」

「それはなぜ？」

「……逃げ場がどこにもありません」

「六畳一間の小さな殻に、逃げ込むことはしないのですか？」

「……それでは、意味がないのです。いつまで経っても認められず、私は、私は、いつまでも」

「けれどもあなたは逃げ出して、今、夜の下にいるのでは？」

「……それは、あなたも」

「そう、僕も」

繋いだ手から、指が這い、僕の胸元へ手が伸びる。

そうして、僕にすがるように、彼女は僕に抱きついた。

夜の匂い。

夜の感触。

夜の温もり。

夜の鼓動。

「……私は夜に逃げ込んで、そうして安らぎを手に入れた」

「白日に晒され傷んだあなたは、優しい夜に恋をした」

「……ねぇ、あなたは、私の夜？」

「そうだよ、僕は、君の夜」

彼女は僕の胸元に、顔を埋めて、頬擦った。

ああ、僕は、僕は、夜だ。
僕は、僕は、彼女の夜だ。

「……ずっとあなたを、求めてた」
「互いに愛を求めてた」
「……そうして、やっと、あなたを見つけ、自然と、あなたに、恋してた」
「愛することで、救われて」
「……愛することで、満たされる」
「ねぇ、君は、僕の夜？」
「……そう、私は、あなたの夜」

互いにきつく締め合って、夜であることを確かめる。
確かに、彼女は、僕の夜。
確かに、僕は、彼女の夜。

「僕らは互いに求めてた」
「……互いに互いを求めてた」
「僕は、君を」
「……私は、あなたを」

僕は、彼女の夜なのだ。
彼女の夜は優しくて、例え彼女が白子であろうと、それを口に出すことはない。
彼女の姿を暗闇で包み、鋭い数多の光を遮る。
彼女を守り、彼女を癒し、彼女を愛され、彼女を愛す。
そう、僕は、彼女の夜だ。
そうして、僕は、彼女自身だ。

「……けれども、いずれ、夜は明ける」

「だから、僕らは、互いを締める」
「……夜が明けるまで、いつまでも」
「傷を舐め合い、心を癒す」

ああ、僕は、彼女の夜だ。
なんて、なんて、こんなにも。
こんなにも、素晴らしいんだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7159s/

夜は僕

2011年4月27日23時12分発行